

らだと、1,000～2,000キロも近くなる。それでも、はるかな土地に思えるから不思議だ。そのチベットも、地理的情報が続々と入ってくるにしたがっ

て、急速に近くなってきている。世界は本当に狭くなった。

(立正大学)

磯笛のむらから

吉 川 虎 雄

この表題は、房総半島南岸、千倉町白間津の海女、田仲のよさんの著書（現代書館、1985）の題名である。磯笛とは、海女が潜水を終えて浮上した時、強く息を吐き出すために鳴る口笛のことをいう。田仲さんには『海女たちの四季』（新宿書房、1983）という前著もある。いずれも、海女の暮らしを中心とする白間津の民俗が記されている。

私はこれらの本を、昨秋千倉海岸を調査した時に、漁協の売店で見付けた。両著の間には多少重複した部分もあるが、素朴な筆致で語るように書かれた田仲さんの本には、ほのぼのとした暖かみを感じられる。編者の手がどれだけ加わっているかは知らないが、私はその生き生きした叙述にすっかり魅了された。そして、およそ民俗とは縁遠い仕事をしてきた私でさえ、これらの本によって千倉海岸に一層親しみを感ずるようになった。

私が千倉海岸を初めて調査したのは、もう30年あまりも前の昭和28～29年のことである。それ以来、実習や調査の指導などのために、1年置き位にここを訪れている。そして、5年ほど前から、もう一度調査する気になって、たびたびここに来るようになった。以前から疑問を抱いていた波蝕棚の形成水準を明確にすることと、完新世海成段丘に見られる多数の小崖は地震の際の隆起を示すものかという疑問を解くこととが、その目的であった。海岸の岩礁地帯の水準測量から始まったこの調査は、とうとう5年を要した。初めは測量助手にすぎなかった茅根 創君が、その間ずっと協力してくれ、私の東大退職後は、彼がむしろ中心になってこの研究を推進した。その成果は地理学評論59巻1号（1986年1月）に発表したもので、興味のある方はそれをご覧ください。

この調査の際に、耕地の開けた段丘面を測量していると、野良で働く土地の人々から、何をして

いるのかとたびたび問い掛けられた。それらの会話を通して、畑の中から出た貝の話とか、大正12年の大地震の前の海岸の様子とか、あるいは元禄の大地震に関する言伝えとかを、聞くことができた。そして、この海岸に住む人々が、その土地柄のせいであろうか、地震や土地の変遷に一方ならぬ関心を持っていることを知った。私たちの地形調査にも、土地の人々に関心を抱かせる面があったのである。しかし、この海岸につらなる狭い土地が人々の生活をいかに支えているのかを、私はさらに深く考えるまでには至らなかった。

田仲さんの本は、この海岸に住む人々の生活や人生の哀歓を、見事に描いている。調査の時に見た様々な風物が何であり何を語っていたのか、田仲さんの本を読んだ今になって、ようやく理解できたものが多い。ことに、私たちの調査対象の一つであった岩礁地帯が、海女を中心とする土地の人々の生活にどれほど深く関わっているかを、まざまざと教えられた。もっと早くこの本に接していれば、ここを訪れる楽しみは一層増していたことであろう。田仲さんの本はそのような思いを強くさせるものであった。

40年あまり、地形調査のために、あちこちをがむしゃらに歩いてきたが、土地の人々の暮らしにもう少し目を注いでくればよかったと、近頃になって思うことがある。私にとって田仲さんの本は、このような思いを新たにさせるとともに、長年調査してきた土地に住む人々の生活に初めて触れさせてくれた、『一冊の本』である。民俗を記した本にはもっとすぐれたものもあろう。しかし、その土地に生きる平凡な主婦が日常の暮らしをありのままに記したこの本には、稚拙な点もあるが、生きた人間の生活が描かれている。私はそのような本に強く引きつけられるのである。（東京農業大学）